

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	さかなし けんた	所属・職名
	坂梨 健太	京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻・博士後期課程
e-mail	mokkosu81@gmail.com	
発表題名 (英語)	Cocoa-based Agroforestry in southern Cameroon: Is it Real or Ideal ?	
著者名	Kenta SAKANASHI	
会議名 (英語)	4th International Conference of Asian Rural Sociology Association	
開催地(国、市)	Legazpi, Philippines	
参加期間	2010年9月6日 ~ 9月12日	
<p>今回参加したアジア農村社会学会 (ARSA: Asian Rural Sociology Association) は 1996 年に設立され、今年で 4 回目となる。開催国であるフィリピンをはじめ、日本、タイ、インドネシア、韓国、中国などアジア諸国は勿論のこと、ポルトガル、カナダから参加する人もおり、参加者は 100 人を優に超えていた。</p> <p>学会開催の数週間前に、マニラでバスジャックによって 8 人の観光客が亡くなる事件があり、マニラから離れているとはいえ学会会場は厳重な警護がなされていた。参加者に対しても会場までのバス送迎が徹底され、不用意に外出しないようにと忠告がなされた。多少窮屈であったが運営側による細心の配慮が伝わる学会であった。</p> <p>私の報告は、中部アフリカ、カメルーンのカカオ生産についてである。アジア農村社会学会なのになぜと思われるかもしれないが、セッションの座長をされた鳥越先生にはアジアの若手研究者が発表できる場だと声をかけていただいた。私自身、熱帯地域の研究者と同じような問題が共有できればという期待があり、エントリーさせてもらった。発表内容は、近年カメルーン南部のカカオ生産が森林を破壊せず、多くの動植物を保持しているとして注目されているが、それを成り立たせている歴史的背景、現地の人びとの森林資源の利用が見落とされていることを指摘し、簡単に他のカカオ生産地域に同じようなシステムを導入することの難しさを主張した。質疑応答では、現地の人びとの土地利用の実態や将来の見通しについて説明を求められ、本当に生物多様性と言えるのかという質問も寄せられた。今後ますます森林保全、生物多様性という側面が注目されるようになり、環境政策や環境 NGO などと現地の人びととの関わりを丹念に追う必要があるだろう。</p> <p>私が他の報告を聞いた限りで感じたことは、当たり前ではあるが、日本や韓国などのいわゆる先進国の研究者と東南アジアの研究者との認識に違いがあるということである。日本や韓国をフィールドとする研究者は、過疎や農業従事者の高齢化の問題、食の安全や有機農業についての議論が盛んであった。一方、東南アジアからの議論は、いかに農業生産を上げるかという</p>		

学会発表渡航支援報告書

点に重点が置かれていた。そのため、議論において視点の違いが鮮明になる場合がしばしば見られた。例えば、日本における有機農業の普及や消費者との提携の話も東南アジアの研究者からは国の制度も十分に整っていない状況でどのようにおこなっていけばいいのか、十分な収量・収入が得られるのかという質問が相次いだ。このことから、単に日本の事例を紹介するだけでなく、他の国の人びとにも共有できる広がりのある報告が必要のように思われた。個人的に印象に残った報告としては、韓国の農家の 3~4 割は東南アジア出身の女性と結婚しているというものである。日本でも海外出身の農村花嫁や最近では外国人研修生として農村に働きにくる中国やインドネシアなどの人びとの問題が顕在化している。これらの話を議論できるようなセッションがあってもよかったと思う。3 年後に開催されるラオス大会に期待したい。

